The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第二次新田文庫について
Author(s)	池田, 光子
Citation	懐徳堂研究. 2021, 12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/86296
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

第二次新田文庫について

池田光子

はじめに

大阪大学の源流の一つと位置づけられている懐徳堂は、大きく二つの時期に分かれる。一つが享保九年から明治二年に至るまでの懐徳堂、一つが大正五年に新たに学舎が竣工されてから昭和二〇年に焼失するまでの懐徳堂である。前者は旧懐徳堂または懐徳堂、後者は重建懐徳堂と称されることが多い。

双方の懐徳堂とも、残念ながら建物は現存しない。しかし、多くの関連資料が伝存しており、その殆どは大阪大学附属図書館懐徳堂文庫（以下、懐徳堂文庫と略称）に収められている。現在の懐徳堂文庫の資料数は約五〇〇〇点。[1] 藩校の文庫に匹敵するほどの分量である。

これらの資料は一時にではなく、懐徳堂に関わる様々な人々の尽力によって、段階的に揃えられた。なお、旧懐徳堂閉校後の資料のゆくえについては、竹腰礼子氏の「大阪大学懐徳堂文庫のなりたちと蒐集の経緯」（『懐徳』第七〇号、懐徳堂記念会、平成一四年。以下、竹腰論考と略称）に詳しい。そこに記されている通り、懐徳堂文庫は複数の資料群（それぞれの資料群にも文庫名が付されている）によって構成されている。懐徳堂文庫を構成するこれらの資料群の中でも、筆者が最も注目しているのは「新田文庫」である。何故なら、貴重資料が多く含まれている資料群でありながら、長年、その内容が明らかとなっていなかったためである。筆者は現在までの研究において、新田文庫の一部である「第一次新田文庫」については、調査及び目録作成を行い、[2] 残りの「第二次新田文庫」については、予備調査を行っている。

本稿では、この予備調査で発見した資料や情報を踏ま

え、第二次新田文庫の紹介とその重要性を指摘するとともに、目録整備の必要性について言及する。

一、成長する懐徳堂文庫

まずは、新田文庫を所蔵する懐徳堂文庫の成立過程について、簡単に触れておきたい。

懐徳堂は、「五同志」と呼ばれる大坂有力町人のサポートを受けて享保九年に開学し、二年後には官許（幕府からの許可）を得て、大坂を代表する学問所（大坂学問所）となった。最盛期は四代学主中井竹山（一七三〇～一八〇四）と弟履軒（一七三二～一八一七）の時とされる。その学術的名声は全国に広まり、当時の著名な文化人たちが懐徳堂に立ち寄った。その交流の幅は広く、儒者だけではなく、大坂の自由な知の拠点とも称される木村蒹葭堂や印聖高芙蓉、江戸画壇の重鎮谷文晁、近代天文学の先駆け麻田剛立など、様々であった。しかし、この勢いも時代の流れには逆らえず、明治二年に閉校となる。資料の一部は売却、一部は懐徳堂最後の教授並河寒泉（一七九七～一八七九）や預人（あずかりにん）中井桐園（一八二三～一八八一）へと引き継がれた。

寒泉と桐園とが先賢の資料を保持しようと尽力したであろうことは、想像に難くない。しかし、個人で多量の資料を受け継ぐことは困難であり、売却や遺漏、分散による継承の断絶が起きた資料があったとしても致し方ないことである。[3] それでも先賢の資料を後世に伝えようとする気概は受け継がれ、特に懐徳堂の歴代学主を輩出してきた中井家の子孫（履軒の曾孫）である中井木菟麻呂（つぐまろ）（一八五五～一九四三）は、多くの資料を蒐集・保持した。

明治末期になると、木菟麻呂と朝日新聞の記者であった西村天囚（一八六五～一九二四）とが中心となり、懐徳堂復興運動が始まる。在阪企業を中心に各方面からの助力を受け、その後の懐徳堂に関する様々な活動の母胎となる懐徳堂記念会が明治四三年に設立された。[4] そして、記念祭や展覧会、関連書籍の出版といった記念事業を経て、大正五年、懐徳堂再建に至る。これが重建懐徳堂である。

重建懐徳堂の敷地内には講堂だけではなく、コンクリート製の書庫も建てられた。[5] その中には、重建懐徳堂設立後に購入した資料のほか、大正一三年に亡くなった天囚蔵書の一部（碩園記念文庫）や懐徳堂記念会の評議員であり十五銀行の頭取も務めた愛甲兼達（かねさと）収集資料などが収められ、約二六〇〇〇冊の資料数となっていた。この重建懐徳堂文庫は、松山直蔵（重建懐徳堂の初代専任

教授）の教務報告によると、「漢学研究者のための特別文庫」[6]を目指して構成された。確かに、碩園記念文庫の楚辞コレクションなどは、現在の楚辞研究においても看過できない資料群である。その後、木菟麻呂が所蔵する旧懐徳堂資料の一部も寄贈されたことにより（昭和八年・同一四年）、重建懐徳堂文庫はより貴重な文庫へと成長していった。

順調に発展する中、戦火に襲われる。昭和二〇年、大阪大空襲で重建懐徳堂の学舎が焼失。幸いなことに書庫はコンクリート製であったため、文庫の資料群は難を免れた。しかし、重建懐徳堂としての活動は限界を迎え、昭和二四年に大阪大学法文学部が出来た際[7]、重建懐徳堂文庫は「懐徳堂文庫」として大阪大学に寄贈された[8]。大阪大学は「大阪における学問の伝統を示す貴重な遺産」[9]としてこれらの資料を継承。この時の資料数は、約三六〇〇〇冊であった。

懐徳堂文庫への移行後も、懐徳堂または懐徳堂関連資料（関連人物旧蔵資料を含む）の寄贈や寄託が続いた。主な物では、昭和二七～二八年の岡田文庫、昭和三一年の寒泉文庫、翌三二年の木間瀬文庫がある。昭和五一年には、この時までに懐徳堂文庫に収められた書籍を対象に、『懐徳堂文庫図書目録』（大阪大学文学部、昭和五一年）が編纂・出版された。ここで漸く、約四七〇〇〇冊の懐徳堂文庫所蔵書籍の中身が広く知られることになる。この『懐徳堂文庫図書目録』の情報は、現在も懐徳堂文庫資料の基礎情報となっている。

「基礎情報」と記したのには、二つ理由がある。一つは、『懐徳堂文庫図書目録』はそのタイトルのとおり書籍に限定した目録であり、器物は除外されているからである。もう一つは、本目録作成後も定期的に資料収集は行われ、言うなれば懐徳堂文庫は現在も「成長」しているのだが、これらの資料は、当然本目録には含まれていないためである[10]。そして残念ながら、その成長記録とも言える目録は、適宜整備されていると言い難い。

このように、目録が整備されていない資料群の中で最も資料数が多く、且つ二つの懐徳堂それぞれに関する貴重資料を多く含んでいるのが「新田文庫」である。

二、新田文庫（中井家資料）

新田文庫は、『増補改訂版懐徳堂事典』（出版年等は注（1）参照。以下、『事典』と略称）で、次のように解説されている（傍線は筆者による）。

大阪大学所蔵の懐徳堂文庫を構成する文庫の一つ。昭和五十四年（一九七九）、中井木菟麻呂の妹終子（昭和三十年没）の養女に当たる新田和子所蔵の中井家関係資料約千六百点が大阪大学懐徳堂文庫に寄贈され、これを「新田文庫」と称する（第一次新田文庫）。その後、昭和五十八年（一九八三）にも、印章・文房具・扁額・書簡など約二千余点の寄贈があり、懐徳堂の歴代教授を務めた中井家関係資料が格段に充実することとなった（第二次新田文庫）。内容の紹介が加地伸行「懐徳堂物語（二）」および「新資料中井家資料（旧新田文庫）」としていずれも『懐徳』五十二号に掲載されている。

右の解説にもあるように、新田文庫は一括ではなく、昭和五四年と同五八年との二回に分けて収められた。傍線で示したとおり、現在は、この寄贈の時期に沿って資料群を分け、前者を第一次新田文庫、後者を第二次新田文庫と称している。そして総称として新田文庫の名称を用いているが、本来は異なる用いられ方であったらしい。受入時は第一次新田文庫を「新田文庫」と称し、第二次新田文庫については、右の解説文中に挙がっている「新資料中井家資料（旧新田文庫）」[1]（以下、「中井家（旧新田）」と略称）に拠ると、第一次の分も含め「中井家資料」と称したようである。おそらく昭和五四年の際には、元の所蔵者である新田和子氏の姓を採って、「新田文庫」の名称が付けられたのであろう。そして、昭和五八年受入の際には、資料の特質に注目し、「中井家資料」の名称に統一しようとしたのではないかと推測される。この「特質」について、「中井家（旧新田）」は、第二次新田文庫に対し「（一）中井家の私的側面を伝えるもの」と「（二）中井天生関係のもの」とに大別できると指摘している。この指摘は第一次新田文庫にも確認できるため、「中井家資料」の名称で統一しようとしたのも当然と言えよう。

さて、「中井家資料」の中には、中井家の先賢竹山・履軒に関する資料が散見される。中井家関連資料なので当然とも言えるが、ここで一つ疑問が生じる。前章で触れたとおり、昭和初期の段階で、木菟麻呂は多数の貴重資料を寄贈している。この中には、懐徳堂の先賢でもある竹山・履軒の資料も勿論含まれている。では、それぞれの竹山・履軒関連資料に何か差異はあるのであろうか。

新田文庫の竹山・履軒関連資料の多くは、草稿や文具、私的な書簡類である。対して木菟麻呂が昭和初期に寄贈した竹山・履軒に関する資料は、懐徳堂の名と共に良く

その存在が知られ、且つ成書された資料が多い。これを先述の「中井家の私的側面を伝える」に照らし合わせると、あくまで推測だが、これが選別の基準となっていた可能性は高い。個人的なやり取りを記した書簡や、個人を示す印章、他人の目に触れることを前提としていない草稿類などは、懐徳堂ではなく、中井家の私的資料とし、分けて手元に大切に保管したのであろう。

では、このような中井家私的資料群が、何故、懐徳堂文庫に至ることになったのだろうか。この経緯等について、第一次と第二次との差異も視野に入れつつ、現時点で判明している情報をまとめておく。

まず、第一次新田文庫の寄贈については、木村英一[21]「懐徳堂先賢の業績と遺品との蒐集・整理・保存に関する近況について」（『懐徳』第五〇号、懐徳堂堂友会、一九八〇年。以下、木村論考と略称）の中に、次の情報がある。

現在池田に在住される新田和子夫人は、終子先生の養女として晩年の両先生に事え、中井家伝来の遺品や両先生の手沢の書籍・両先生自筆の著書・記録・日記等をよく保存して今日に伝えられた。この記念すべき遺物を如何に整理し保存するかについては、夙に少数の識者の思いをめぐらしていた所であったが、新田夫人の終始変らぬ誠意と、関係各位の善処とによって、終にその方途を実現すべき機会が到来した。即ち昨昭和五十四年春、夫人は両先生を偲ぶ若干の遺品以外の全部を挙げて、阪大図書館の懐徳堂コーナーに寄贈された。これがいわゆる新田文庫である。遺品の内容は多種多様であって、その紹介には今後の綿密な整理を待たなければならぬが、受入れの便宜上仮りに羅列した項目の手びかえによれば、無慮三百五十項目に及んでいる。

第二次新田文庫については、「中井家（旧新田）」に次の記述が見られる。

中井終子氏没後、新田氏は相続した遺物の内、保管場所の関係上、二分して、かさばる書籍類を中心にしたものを、吹田市内のハリストス正教会に寄託し、残りの分（中井終子氏が特に保管を遺言した印章などを含む）を自宅で保管されてきた。その後、昭和五四年に、新田氏は前者を大阪大学に寄贈された。これが「新田文庫」と称されているものである。そして今回、はしなくもその後者をも入手することになったわけである。

以上の情報をまとめると、各々に次の点が確認できる。

・書籍類を中心とした広い保管場所が必要なものは、吹田市のハリストス正教会（大阪ハリストス正教会を指す）に寄託されていた。これらを昭和五四年に大阪大学へ寄贈。＝第一次新田文庫

・新田氏は、中井終子が特に保管を遺言したもの（印章類）と中井木菟麻呂・終子を偲ぶ資料とを手元に保管。＝第二次新田文庫

第一次と第二次との緩やかな区分は判明したが、新田氏が資料を手放すことにした理由は、現在確認できる資料だけでは不明瞭である。木村論考に「少数の識者の思いをめぐらしていた」とあり、以前より新田氏と有識者との間で資料に関するやり取りがあったようにも読み取れるが、現時点ではそれを裏付ける記録はない。第二次新田文庫に至っては、そのようなやり取りは一切無かったようである。このことは、『事典』の解説で紹介されていた加地伸行氏「懐徳堂物語（二）」（以下、加地論考と略称）の「目に見えない因縁の手が、懐徳堂の事業活動とこのコレクション（筆者注：第二次新田文庫を指す）とを結びつけたものと思います」から窺える。[13]

入手経路については、第一次新田文庫は未詳だが、第二次新田文庫は、当時の中尾松泉堂書店主人中尾堅一郎氏の「懐徳堂のことなど」（『懐徳』第六〇号、懐徳堂記念会、平成三年。以下、中尾論考と略称）が参考になる。

昭和五十八年に懐徳堂・友の会が発足されて、懐徳堂関係史料の収集が行れた折に、（中略）池田石橋の中井和子さん宅の二階から懐徳堂・水哉館の印章や同堂遺物遺品聯軸がその侭に残存して居り、古い箪笥の引出しから中井竹山・履軒はじめ中井家代々の葬儀記録が出てきて歓喜したこともあった。

右にははっきりと書かれていないが、第二次新田文庫は中尾松泉堂の仲介を経て入手した資料群である。当時の懐徳堂・友の会の会計資料を調べると、[14]昭和五八年九月一二日と一一月一五日との二回に分けて、第二次新田文庫資料購入として計三百五万円が中尾松泉堂に支払われている[15]（以下、新田伝票と略称）。

懐徳堂文庫へと至る経緯に一部疑問は残るが、その出処は明らかであり、新田文庫が重要な資料群であることは確かである。しかし、新田文庫は、一部の人々にしか知られていない存在となってしまっていた。かく言う筆

者も、実際に懐徳堂文庫に足を踏み入れるまで、知らずにいた。ところが、新田文庫に属することを示す付箋が添付された資料群の中に、散逸したと思われていた資料（中井履軒『左九羅帖』とその対である『画觸（えくじり）』）や、前野良沢・杉田玄白らによる『解体新書』の前年に成書されたことで注目されている『越俎弄筆（えっそろうひつ）』の草稿、重建懐徳堂に関する木菟麻呂の日記、『懐徳堂考』下巻の下地とも言える『懐徳堂水哉館先哲遺事』など、貴重資料が山積していることに気づいた。これらの資料が注目されていなかったのは、偏に目録が整備・公開されていなかったためである。そこで、新田文庫目録作成は急務であると考え、冒頭で述べたとおり、第一次新田文庫の目録を作成した。現在は、第二次新田文庫目録作成のための予備調査を行っているが、この調査過程で、第二次新田文庫の目録に関する二つの興味深い資料を発見した。次章では、この資料について考察する。

三、第二次新田文庫仮目録の行方

資料の授受に際し、「目録」は不可欠である。なお、本稿で言う「目録」とは、検索機能や書誌同定を可能とした内容を記載したものだけではなく、「リスト（一覧表）」類も含んでいる。

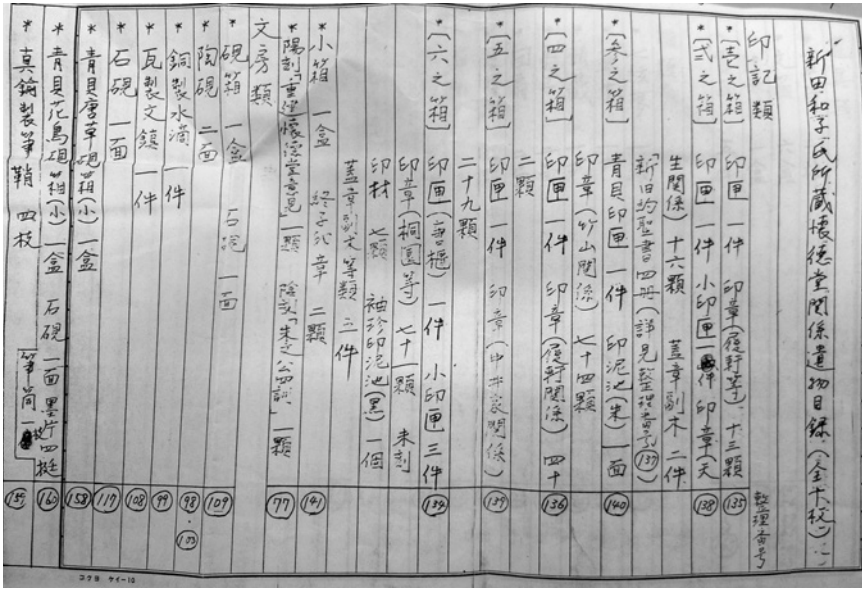
前掲の木村論考からは、第一次新田文庫の目録に該当する物として「手びかえ」が作成されていたことが分かる。おそらくは、これが第一次新田文庫受入時に最も近い時期に作成された目録であろう。そこに「三百五十項目」の資料が挙げられていたようだが、竹腰論考では「昭和五四年に書籍約三〇〇点六〇〇冊と文書・器物類が約一〇〇点」となり、数に変動が見られる。木村論考と竹腰論考との間で資料数に五〇点の差が出ているのは、竹腰論考に至る間に改めて調査が行われたためと考えられる。しかし、先述のとおり、筆者は第一次新田文庫の目録を作成しており、この成果に基づくと、文書・器物類は確かに約一〇〇点だが、書籍は約六七〇点、冊数にすれば更に増量する。[16] つまり、竹腰論考と合致しないのである。推測ではあるが、竹腰氏は同論考の末尾に、資料の数量は懐徳堂記念会にあった仮目録に依拠しており現物と照合した計数ではない、と断りを入れているため、竹腰論考の数値は実際に数えたものではなく、「仮目録」に基づいた情報であろう。第二次新田文庫についても「書籍約三〇点五〇冊と文書・器物類約一三〇点」と記しているが、この情報も「仮目録」に拠る可能性は高い。残念ながら、第一次新田文庫の「仮目録」に該当するよう

な資料は、現時点で見つけ至っていない。しかし、第二次新田文庫については、該当すると思われる資料が二つ見つかった。

まず一つ目は、新田伝票に添付の「新田和子氏所蔵懐徳堂関係遺物目録（全十校）」と題された手書き資料のコピーである。おそらく、資料購入にあたり作成されたものであろう。抄者は不明だが、中尾論考を踏まえると、中尾堅一郎氏が作成者であると推測される。[17] 本稿では、これを「中尾目録」と称する。ちなみに購入よりも数ヶ月前に作成されている。[18]

二つ目が、大阪大学懐徳堂研究センターにある「新ロッカー」とタイトルの付いた五枚の罫紙である。本稿では便宜上、「センター目録」と称する。

井上了氏「懐徳堂文庫等所蔵新収資料・器物等目録」（『懐徳堂文庫の研究　共同研究報告書』、大阪大学大学院文学研究科、平成一五年）の中には第二次新田文庫の目録が掲載されているが、冒頭に「竹腰礼子氏（元財団法人懐徳堂記念会嘱託研究員）より大阪大学文学部懐徳堂センターへ報告された一連の資料リストをセンターにおいて整理したものである」との但書きがある。そこで、平成二八年頃、大阪大学懐徳堂研究センターに問い合わせたところ、作成者や作成時は不明だが、該当する可能

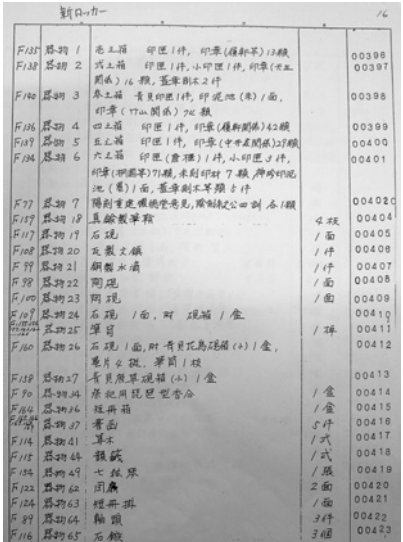

新田和子氏所蔵懐徳堂関係遺物目録（全十校）
印記類
整理番号
*〔壱之箱〕印匣一件　印章（履軒等）十三顆　135
*〔弐之箱〕印匣一件　小印匣一件　印章（天生関係）十六顆　蓋章副木二件　138
*〔参之箱〕青貝印匣一件　印泥池（朱）一面　140
*〔四之箱〕印匣一件　印章（竹山関係）七十四顆　136
*〔五之箱〕印匣一件　印章（中井家関係）二十九顆　139
*〔六之箱〕印匣（書櫃）一件　小印匣三件　134
印章（桐園等）七十一顆　朱刻
印材七顆　袖珍印泥池（黒）一個
蓋章副丈等類三件
*小箱一盒　終子印章二顆　141
*陽刻「重建懐徳堂意見」一顆　陰刻「朱之公四訓」一顆　77
文房類
*硯箱一盒　石硯一面　109
*陶硯二面　98・103
*銅製水滴一件　99
*瓦製文鎮一件　108
*石硯一面　117
*青貝唐草硯箱（小）一盒　158
*青貝花鳥硯箱（小）一盒　石硯一面　墨片四挺　160
*真鍮製筆鞘四枝　筆筒一枚　159

中尾目録

性の高い資料として紹介して頂いたものが「センター目録」である。[19]

センター目録には、第二次新田文庫と思われる一連の資料名が書写されており、井上氏のものと対照すると、配列・資料名等全て一致していた。よって、センター目録が「懐徳堂センターへ報告された一連の資料リスト」であることは、ほぼ確実と言える。

では、中尾目録とセンター目録、双方の関係性はどうであろうか。「仮目録」に該当するかの検討も含めて比較対象を行ったところ、次のことが判明した。まずは、全体的な異同について見ていく。



新ロッカー　16

F135	器物 1	花之箱　印匣1件，印章(種新草)13顆			00396
F138	器物 2	式之箱　印匣1件，小印匣1件，印章(式之関係)16顆，蓋章副本2件			00397
F140	器物 3	参之箱　青貝印匣1件，印泥瓶(朱)1面，印章(17cm関係)20顆			00398
F136	器物 4	四之箱　印匣1件，印章(種新関係)42顆			00399
F137	器物 5	五之箱　印匣1件，印章(中井貞関係)37顆			00400
F134	器物 6	六之箱　印匣(倉庫)1件，小印匣3件，印章(明墨等)71顆，本刻印材7顆，陶器印泥瓶(墨)1面，蓋章副本等類3件			00401
F77	器物 7	陶剤重建懐徳堂意見，陶制禁止公四制 各1顆			00402
F137	器物 18	真鍮製筆筒	4枝		00404
F117	器物 19	石硯	1面		00405
F108	器物 20	瓦製文鎮	1件		00406
F99	器物 21	銅製水滴	1件		00407
F98	器物 22	陶硯	1面		00408
F100	器物 23	陶硯	1面		00409
F107	器物 24	石硯 1面，附 硯箱 1盒			00410
[illegible]	器物 25	墨司	1棒		00411
F160	器物 26	石硯 1面，附 青貝花鳥硯箱(小) 1盒，亀片4枚，筆筒1枝			00412
F139	器物 27	青貝蒔絵硯箱(小) 1盒			00413
F90	器物 34	原紙用琵琶型書命	1盒		00414
F164	器物 36	短冊箱	1盒		00415
[illegible]	器物 37	書函	5件		00416
F114	器物 41	算木	1式		00417
F115	器物 44	銀箸	1式		00418
F134	器物 49	七絃琴	1張		00419
F122	器物 62	団扇	2面		00420
F124	器物 63	短冊掛	1面		00421
F89	器物 64	軸頭	3件		00422
F116	器物 65	石鉢	3個		00423
F84	器物 67	硯墨等写真4枚，写真立2基			00424

センター目録

中尾目録は縦書きの用紙を上下二段に分け、上段に資料名と数量、下段には「整理番号」として丸数字を記している。センター目録は横書きの用紙を五列に分け、左からFで始まる番号、分類、資料名、数量、通し番号（五桁）を記している。双方を対照すると、資料名は勿論、中尾目録の「整理番号」をセンター目録のF番号と読み替えれば、ほぼ一致する。つまり、センター目録は、中尾目録を転記し、通し番号を付けただけの資料という可能性がある。そこで冒頭から順に対照すると、明らかに異なる点が二点判明した。一点は、資料の分類である。それぞれの分類は、左の通りである。

《中尾目録》

印記類・文房類・道具類・雑類・特殊遺品類・扁額類・装潢類・短冊類・遺稿類・書簡類・記録類・拓本類・天生収蔵品類・複製類・書籍類

《センター目録》

器物・掛軸・マクリ・扇子・短冊・書簡・記録・天生関係・中井終子関係

それぞれの分類に沿って資料を配列しているため、資料の記載順は異なるが、資料名は基本的に一致している。

なお、センター目録の分類名は、第一次新田文庫にも共通して見られるものであることから、受入後に第一次新田文庫と同様の整理が行われたのであろう。

もう一点が、資料数と資料内容の差異である。[20]センター目録は一五三点、中尾目録は一八四点、三一点の差異がある。なお、センター目録の方が少ないにも拘わらず、中尾目録には無い資料四点が見える。また、一部の資料にはF番号と整理番号にズレがある。例えば、センター目録でF106は「親族解説図（中井履軒筆）」だが、中尾目録では「万国大年表」を指す。F170「吉田鋭雄未定稿、懐徳堂先賢表並懐徳堂先賢未見遺書目」は、中尾目録によると「聚分韻略」である。そして、今挙げた「親族解説図（中井履軒筆）」「吉田鋭雄未定稿、懐徳堂先賢表並懐徳堂先賢未見遺書目」の双方とも、先述の中尾目録には無い資料四点の内の二点である。ちなみに、「万国大年表」・「聚分韻略」は、センター目録に無い。

とは言え、このようなF番号と整理番号の差異が見られるものは数点であり、先程の三一点の資料数に大きく影響を与えるほどではない。そこで、「万国大年表」・「聚分韻略」がセンター目録に見当たらないことを手がかりに対照した結果、中尾目録の「書籍類」三二件に該当している資料が全て欠けていることが分かった。

なお、センター目録から書籍類が抜けた理由については、竹腰論考の次の記述が参考になると思われる。

> 蒐集された資料は、先にも述べた理由で、現状では書籍は大阪大学附属図書館、軸物・額・文書など器物類は文学部の所蔵となっている。前者については図書館が管理し、後者に関してはこれまでは(財)懐徳堂記念会が管理を行ってきた。

第二次新田文庫に限らず、個人コレクションの多くは、書籍と器物の双方が混在している。このようなコレクションを一括して受け入れるか否かは各機関の状況によって異なるであろうが、大阪大学の場合は、書籍は附属図書館、器物類は大阪大学文学部と分けて受入ていたことが、右の竹腰論考から分かる。また、所蔵は文学部であるが、管理は懐徳堂記念会が行っていたことも確認できる。井上氏の但書きに従うならば、センター目録は懐徳堂記念会の職員によって作成されたものである。とすると、センター目録は、懐徳堂記念会が管理していた器物類のみを対象にしたリストであるため、書籍類は除外されたと推断できる。

中尾目録とセンター目録の異同が明らかになったの

で、次に、竹腰論考が参照した「仮目録」に該当するのかを検討する。結論を先に述べると、双方とも異なるようである。その理由は、資料数である。竹腰論考で第二次新田文庫の資料数は、「書籍約三〇点五〇冊と文書・器物類約一三〇点」と記されていた。書籍数は中尾目録と一致するものの、文書・器物類の数が大きく異なる。中尾目録、センター目録とも、器物類の資料数は一四〇を優に超えている。竹腰論考の数値が資料を実見した数と言う可能性もあるが、予備調査で筆者が第二次新田文庫を概観した際、少なく見積もっても一四〇点は超える資料数であったため、一三〇点という数字は首肯できない。よって、第二次新田文庫の「仮目録」も第一次新田文庫と同様、現時点で未詳と言わざるを得ない。

資料数と言う点にのみ着目するならば、目録では無いが、「中井家（旧新田）」にも触れておきたい。

「中井家（旧新田）」は、受入直後に作成された第二次新田文庫報告書である。受入直後と言うこともあってか、資料の分類は中尾目録に即している。そして、道具類・雑類・特殊遺品類・拓本類・天生収蔵品類・複製類を除き、各分類の資料数が記されている。[21] これらの数字は、単純に中尾目録に掲載の資料数を記しただけではないかとも受け取れるが、センター目録にのみ記載されていた資料「親族解説図（中井履軒筆）」が紹介されているため、中尾目録の情報をそのまま用いたのではなく、受入後の調査を踏まえた上で執筆されたものと考えられる。

結果として、残念ながら「仮目録」の謎は解明できなかったが、中尾目録とセンター目録、二つの異なる目録の存在が明らかになった。整理番号とF番号とが異なる理由や資料の異同等、疑問が残された状態ではあるが、資料入手から近い時期に作成された目録があることは、今後の調査を行う上で非常に有力な情報である。

四、第二次新田文庫の貴重資料

二つの目録の存在が明らかになったものの、前章での検討から、やはり第二次新田文庫を網羅した目録は存在しないことが判明した。しかし、このように目録未整備の状況でありながら、受入直後より第二次新田文庫の貴重資料数点が紹介されている。これは、第二次新田文庫の重要性が早い段階から認識されていたためであろう。本章では、現在までに紹介された第二次新田文庫の資料と、予備調査の段階で発見した興味深い資料を紹介する。

まず、最も早い段階で紹介された第二次新田文庫資料は、加地論考で紹介された次の四点である。[22]

F12　履軒肖像　附履軒草稿三枚
F21　履軒宛奉公人（まつ）請状
F84　桐園等写真四枚　写真立三基
F142　中井家歴代襄事録

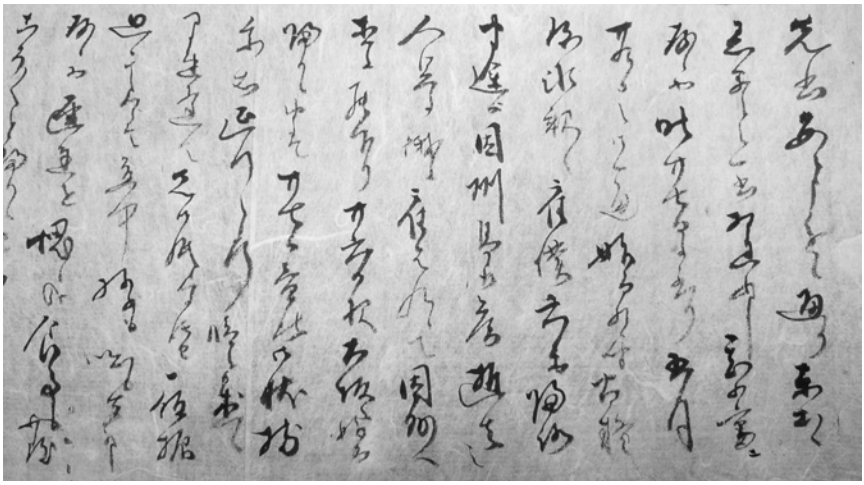
中でも注目したいのは、F142の「中井家歴代襄事録」である。本資料は、旧懐徳堂に関わる中井家数名分の詳細な葬儀記録であり、当時の儒者の葬儀記録がまとまっている資料として貴重である。加地論考はその重要性を鑑みてか、四点の中で最も詳しく紹介している。その重要性と注目度の高さを裏付けるように、加地論考の二年後には、「中井家襄事録」の中から、竹山の襄事録（葬儀記録）が翻刻・紹介され、[23]その三年後には同資料中の別の人物の記録も翻刻されている。[24]

次に、展覧会やインターネット上での公開情報を紹介する。第二次新田文庫の資料が一般に初公開されたのは、大阪市立博物館と懐徳堂記念会、懐徳堂・友の会が、大阪大学の後援を得て開催した「大阪市立博物館特別展『懐徳堂―近世大阪の学校―』」（会期：昭和六一年三月一一日～四月一七日、会場：大阪市立博物館）の時である。[25]この時の展覧会目録の表紙にもなっている印章類は、第二次新田文庫所蔵資料の中でも目玉となる資料の一つである。何故なら、第二次新田文庫には二五〇顆を超える印章が伝えられており、これほどの量がまとまって伝存されたのは希有な例であるためである。なお、これらの印章については、湯浅邦弘氏の一連の研究があり、[26]その研究成果の一部は、資料紹介も兼ねてWEBサイトで公開されている。[27]また、現状の整理状況に関する福田一也氏の報告もある。[28]

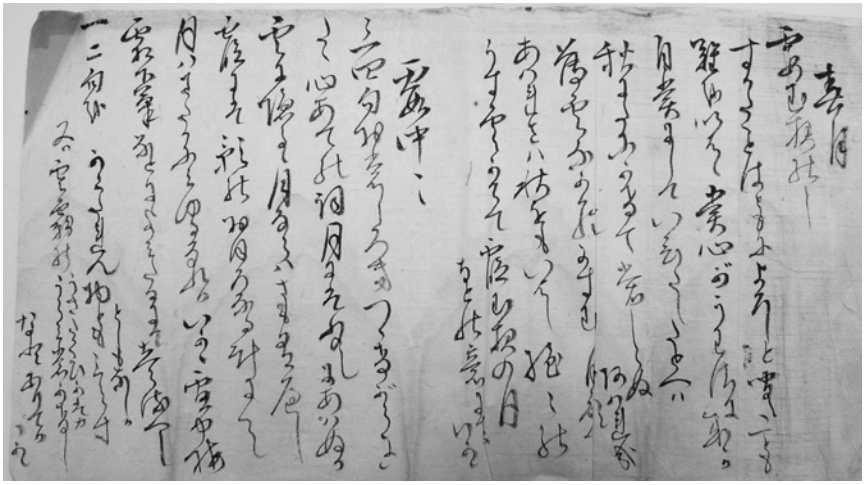
以上の紙面や冊子、インターネット上で既に紹介されている資料のほか、筆者が予備調査の段階で発見した興味深い資料として、本稿では次の資料を紹介する。

F67　蕉園宛竹山書簡
F69　履軒筆和歌評釈
F1　寄附寄贈贈物謝礼書類
F38　磐上閣記[29]
F40　天生筆懐徳堂関係草稿
F48　天生遺稿
F52　山田方谷・三島中洲文稿等

右に挙げた資料の内、F1より左は近代初期の資料である。F67・F69は旧懐徳堂関連資料であり、資料名からでも充分にその重要性が伝わってくるが、F1以降は



F67　蕉園宛竹山書簡



F69　履軒筆和歌評釈

資料名からその内容がほぼ伝わってこない。そのため、F1以降の資料については、簡単な説明を加えておく。

F1は、旧懐徳堂資料に関わる三点の資料をまとめたものである。三点のいずれも興味深いが、特に目を引くのは、懐徳堂文庫の中でも特に重要として取り扱われることの多い資料一三二点が列挙され、それぞれに値段が記されている資料である。どのような意図をもって本資料が作られたのか、詳細な調査が俟たれる。F38は、大阪正教会の建物（三橋楼・大阪生神女庇護聖堂）に関する木菟麻呂の文章である。木菟麻呂は懐徳堂及び中井家資料の伝存と復興に努めた人物としてだけではなく、日本ハリストス正教会（日本正教会）の活動を語る上でも外すことの出来ない人物である。本資料も、その活動に関わる資料であろう。なお、F38だけではなく、第二次新田文庫には日本正教会に関する木菟麻呂と終子の活動に関する資料が多数存在している。F40には、中井終子口述筆記の「安政以後の大阪学校」（『懐徳』第九号、懐徳堂堂友会[30]、昭和六年）や中井木菟麻呂「己巳残愁録」（『懐徳』第一〇号、懐徳堂堂友会、昭和七年）の草稿類が含まれている。成書版との比較対照により、新たな情報が出てくる可能性は高い。F48には、旧懐徳堂の校舎跡に建てられた「懐徳堂旧趾碑」の碑文草稿（朱入り）や懐徳堂堂友会幹事からの書簡が含まれており[31]、当時のメセナ運動を知るための貴重な資料である可能性が高い。F52には木菟麻呂と三島中洲との交流を示す資料だけではなく、中国近代詩人として著名な蔣智由の書簡も含まれており、当時の知識人たちの交流を窺い知ることができる貴重な資料である。

以上に紹介したように、第二次新田文庫には、旧懐徳堂・重建懐徳堂だけではなく、日本正教会の活動や、近代の知識人達との交流を示す資料も多数遺されている。明治から昭和初期、所謂日本近代初期の資料が研究対象として重視されるようになったのは近年のことであるが、まさに第二次新田文庫は、それらの資料が多く含まれている。但し、右の資料説明にも表れているとおり、現状の資料名だけでは内容が窺うことが難しい状態であるため、単純なリストではなく、内容の詳細情報を含んだ目録の整備が望まれる。

また、目録を整備することは、資料の価値が明らかになることにも繋がる。価値が明らかになることは、今後の保存・管理の対応にも密接に関わってくることでもある。このことは、決して詳細な目録とは言えない中尾目録・センター目録からでも実感した。

懐徳堂文庫には、どの文庫に所属する資料なのか、ど

のような由来・価値を持つ資料なのかが不明なため、配架や保存が躊躇されている資料がある。その中には、中尾目録・センター目録の発見により、第二次新田文庫に関わる資料であると分かった物がある。また、先述の印章類は、第二次新田文庫であることを示す印しがないため、第二次新田文庫の資料であることがほぼ忘れられてしまっていた。加えて、印章に添付された紙片に書かれている「壱」から「六」の数字が指す意味は謎とされ、等閑視されていた。しかし、中尾目録・センター目録を確認すると、印章類が第二次新田文庫の資料であることは言うまでもなく、数字が寄贈時の箱番号を示していることも判明した。箱の区分には一定の意味があるため、蔑ろにすることはできない[32]。

以上のように、今後の資料の適切な保存・管理の観点からも目録整備は必須である。

おわりに

以上、第二次新田文庫の由来や貴重資料の紹介と並行し、目録整備の必要性について述べた。受入時からの数年間は、研究者からのアプローチだけではなく、懐徳堂記念会、懐徳堂・友の会も積極的に資料調査を進めていたようである。それは次の記録から窺える（傍線は筆者による）。

懐徳堂に伝わった書類や品々、中井家伝来の書籍や遺品などについては、懐徳堂文庫の一部として大阪大学に収蔵されている物のうち、書籍に関してのみ、調査分類がある程度なされたという状態のままでした。数年前に新田和子氏より寄贈された中井家資料と、昨年入手した同資料の内の残されていたものも含めての懐徳堂関係資料（主として遺物）の調査が、今夏から始められました。資料の全貌を把握し、展示公開に備えようというのが今回の目的です。（「懐徳堂友の会だより」No.5（昭和五九年九月））

懐徳堂関係資料（大阪大学収蔵の懐徳堂文庫および中井家資料）のうち、書籍を除いた遺物、墨跡、記録類等の調査が昨年より始められましたが、仮分類がすみ、現在は写真撮影が進められています。貴重な資料、興味深い品々が数多く含まれていますので、全貌が明らかにされるのが待たれます。（「懐徳堂友の会だより」No.6（昭和六〇年一月））

しかし、昭和六三年頃を境に、第二次新田文庫に関する紹介や資料調査の報告は止まる。「中井家襄事録」も、全てが翻刻されないまま現在に至っている。このような状態になった正確な理由は不明だが、昭和六〇年の寒泉文庫、続く昭和六一～六二年の逆瀬文庫の蒐集・寄贈が、一つの原因では無いかと予測している。限られた人員で器物類を管理していた懷徳堂記念会としては、新資料である寒泉文庫・逆瀬文庫の対応に追われ、第二次新田文庫目録整備や資料調査を続行するのが難しくなったのであろう。

長年謎に包まれていた第二次新田文庫だが、本稿で紹介したとおり、懷徳堂研究だけではなく、近代初期の知識人達の様相を窺う上でも重要となる資料が多く含まれている。それらを研究の俎上に載せるためにも、今後も継続して調査を行い、早期の目録整備に努めたい。

［付記］本稿は、第九回（通算第二二回）懷徳堂研究会（平成二八年一二月六日（日）於大阪大学文学部大会議室）で発表した「「第二次新田文庫」整理作業のための事前調査」を基に修訂を加え、且つ第二次新田文庫で発見した新資料の情報を追加したものである。

注

（1）『増補改訂版懷徳堂事典』（湯浅邦弘編、大阪大学出版会、平成二八年）「大阪大学附属図書館」の説明による。なお、竹腰論考では、書籍五三五〇〇冊・器物六〇〇点と記されている。

（2）拙稿「第一次新田文庫暫定目録」（『懷徳堂センター報２００４』、大阪大学大学院文学研究科懷徳堂研究センター、平成一六年）、同「第一次新田文庫暫定目録（続）」（『懷徳堂センター報２００５』、大阪大学大学院文学研究科懷徳堂研究センター、平成一七年）。現在はこの成果を踏まえて図書館のデータが作成され、第一次新田文庫の書籍に関しては、大阪大学附属図書館の蔵書検索（ＯＰＡＣ）に反映されている。

（3）竹腰論考には、売却・遺漏だけではなく、盗難や親戚への分散についても触れている。

（4）大正二年に財団法人として認可。現在の懷徳堂記念会へと至る。

（5）書庫は大正一五年に竣工。

（6）『懷徳』第五号（懷徳堂創学二百周年　同重建十周年祭典並記念式号）、懷徳堂堂友会、昭和二年。

（7）法文学部の設置は昭和二三年九月。

（8）周辺状況については、木村英一「今日の懷徳堂記念会」（『懷徳堂の過去と現在』、大阪大学、昭和二八年）に詳しい。

(9)『懐徳堂文庫図書目録』(大阪大学文学部、昭和五一年)の序文(大阪大学文学部長梅溪昇)による。

(10)購入や寄贈の仲介等は、懐徳堂記念会が中心となって行っている。なお、資料の保管・保存等の作業については、懐徳堂記念会は行っていない。

(11)執筆者は未詳。おそらくは、当時懐徳堂記念会に勤務していた岸田知子氏(後に中央大学教授)の手によるのではないかと思われる。

(12)木村英一は、この論考発表時は大阪大学名誉教授であるが、大阪大学に勤務時は、懐徳堂記念会及び懐徳堂堂友会の運営に深く関与していた。そのため、このように懐徳堂資料の動向に詳しかったと思われる。

(13)加地伸行氏(大阪大学名誉教授)は、当時懐徳堂記念会の評議員を務めていらっしゃったこともあり、第二次新田文庫の受入に深く関与されていた。氏からは、平成二八年頃、第二次新田文庫の受入について、数回にわたりご教示を頂いた。その際、新田氏と縁ができたのは偶然であり、当時新田氏はご高齢ということもあり、資料の保管に限界を感じていらっしゃったとの情報を頂いている。

(14)「懐徳堂・友の会」とは、懐徳堂記念会の事業を後援するために作られた任意団体である。平成八年には、懐徳堂記念会に一本化され、発展的に解消した。なお、筆者は平成二二年度〜平成二九年度まで懐徳堂記念会に勤務しており、その際にこの伝票を確認した。

(15)購入に関する件についても加地氏にご教示を賜ったところ、昭和五四年は寄贈だったが、昭和五八年の時は購入となり、購入費用の支払いと諸処理(整理作業や資料価値の認定等)を含めて中尾松泉堂に依頼したとご教示頂いた。

(16)『事典』で第一次新田文庫の資料数が「約千六百点」とあるのは、冊数でカウントした資料も含むためであろう。

(17)注(13)も参照。

(18)中尾目録の末尾に「昭和五十八年四月三十日調査・五月一日仮目録作製・五月二十九日本目録作製」とある。

(19)当時の懐徳堂研究センター職員は福田一也氏である。氏はセンターが持つ様々な資料を快く提供してくださった。

(20)資料数は、整理番号またはF番号の数に基づく。但し、番号は重複するが資料名が異なる場合には、別資料としてカウントした。

(21)『事典』に記載の第二次新田文庫資料数は、これに基づいたと思われる。

(22)本稿ではF番号で記しているが、中尾目録の整理番号と一致している。なお、資料名も双方の目録と一致している。以下紹介する資料も特に注記が無い限り同様。

(23)山中浩之・小堀一正「資料報告　中井竹山葬儀記録」(『懐徳』

は竹山関係、「五」は中井家関係、「六」は桐園等、と分けられている。

第五四号、懐徳堂記念会、昭和六〇年）

（24）山中浩之・小堀一正「資料報告　中井甃庵・甃庵夫人・中井蕉園葬儀記録」（『懐徳』第五七号、懐徳堂記念会、昭和六三年）

（25）この展覧会の図録が『懐徳堂―近世大坂の学校―』（大阪市立博物館、昭和六一年）である。

（26）「中井竹山の印章」（『懐徳堂センター報２００７』、大阪大学大学院文学研究科懐徳堂研究センター、平成一九年）、「中井履軒の印章」（『懐徳堂センター報２００８』、大阪大学大学院文学研究科懐徳堂研究センター、平成二〇年）等。

（24）「ＷＥＢ懐徳堂」（http://kaitokudo.jp/Kaitokudo/navi/index.html）。

（28）「懐徳堂印の整理と保存について（付録）懐徳堂印データベース」（『懐徳堂研究』第七号、大阪大学大学院文学研究科懐徳堂センター、平成二八年）。

（29）本資料は、中尾目録・センター目録とも「嵯峨にちなみある文章詩歌集　二十一点」となっているが、実際は本稿で紹介したとおりである。

（30）「懐徳堂堂友会」とは、重建懐徳堂関係者の同窓会。懐徳堂記念会が行っていた諸事業の後援組織。昭和五八年に懐徳堂・友の会（注(14)参照）へと発展的に解消した。

（31）懐徳堂旧趾碑は、現在、日本生命本店ビルの南側壁面にある。

（32）「壱」と「四」には履軒関係、「弐」は木菟麻呂関係、「参」